

4270

特54

14

歌舞伎十八番

鳴神

全一冊

正本

歌八番 鳴神

岩屋の場

一箇のたえま

白雲坊

尾上菊五郎
中村助五郎
佐渡島 長五郎
市川海老藏



本陣一面輪廻なる岩山面に高少五尺になたれ七八尺計
 のかさわけ土手三方上に四本柱たて奇麗なる座り四方
 に向めを張り後ろ山水橋懸りけんそなる岩組大瀧あり流
 の山に大竹二本たてて繩にてえめを張る但し後に瀧壺
 より仕掛にて水を吹止大竹をつたふて瀧大分のぼる仕
 掛其外輕き手頃のなげ岩大分岩組に添てある幕の内より
 トヒヨくにて幕明くと白雲坊黒雲坊坊主にて玉だすき
 にて花道より聞たかく聞たぞくと言ながら本舞臺先
 へたつ台方やむ 白雲坊「聞たかく」 黒雲坊「聞たぞく」
 白「何を聞た」 黒「本堂の後で聲を聞た」 白「たわけ者其様
 な事でないわいの師の坊鳴神上人の此度の行法のわけを

聞たかど云ことよ 黒「わけの何にも知らぬ」 白「知らぬと
 いふことが有ものか知らざアいふてさかせう先づ此度師の
 坊鳴神上人の行法といふのなにやら内裏様へ願ひを立ら
 れた其願が勅許がないといふて三千世界の龍神を封じ込
 め世界に雨を一てきもふらせまいと言行法じや夫で見イ
 先此三十日あまり一てきの雨がふらぬいなんどきつても
 のじやないか 黒「されば此様に雨がふらないでいたを
 上る子供の爲にのよけれどもなりしる時に向ふて百性の
 いかい難儀じや 白「サアそじやて百性に難儀させると
 いふが内裏様を困らすのじやてもど是がかのかいだんを
 願ひなされたを汚免しがないからおこつての事じや 黒
 「内裏様も内裏様じやかいだんを汚免しなされたが能の
 になんにもせよ此行法で一龍をなたの知らぬこそおれ
 とさひぢのくいやうの間違ふたくはつよ出ぬによつて小
 遣ひの一文なし其上にこうさき遣はれて堪る物じやない
 白「又其様な事をいふか師の針の如し弟子の糸の如くと
 もにこらへ死だがよし師匠がかつへ死んだらどもにかつ
 へ死んだがよいそこが行法じやわいの不届者めが」 黒「そう

の思へどもア、氣がつか果たわいの、ろろあきしたく
 白「イヤろろあきの段でない氣うつしたわはうの様に
 成た 黒「サア其氣鬱した所を氣のはつきりとなるやうな
 藥が有がなんどのまさうか 白「なんじや能い藥がある氣
 のはつきりとなる藥ならそれちと香ふ 黒「のませうく
 万病不死といふ藥じや 白「サア早ふくれい 黒「大事の藥
 じやわい夫で懐へん入れぬゆへ藏へ入て置た今戸前を
 開いて出してやらう 白「其様なものはうじやわい今から寺
 へ下つて又五十丁の山へ藥持て登れるものかヤイ 黒「イ
 ヤサお寺の藏でないわいの鼻の先の藏もあるわいの 白
 「はなの先の藏とい 黒「またぐらじや 白「何をト黒雲坊
 またぐらよりびんばら樽を出し 黒「なんどく 慥な藏へ
 入て置たて有ふがやまかしまたぐらのはつねつで能加減
 のかんじやのまづ茶わんも爰もわりト袖から茶わんを取
 出す 黒「さらばのんでさそうかト呑ふとする 白「テッキ
 坊主大ちやくものめ破戒むさんの惡僧め 黒「惡僧とい 白
 「殺生ちうどうじやいんもうごかんじゆ戒を五戒とい
 はざるやかする師の坊の行法の内におんじゆ戒を破る此

儘に差置れぬおのれ見イよト身づくろいして行ふとする
 黒雲坊立ふさがり留る 黒「おがむく」 白「おがむくお
 のれ 黒「誤つて改むるに憚る事なけれ大あやまりじや云
 譯でないが一龍だけにあなたをなぐさめんがため
 其席におれも有やうのいばいひつけて此深山のまつを
 うけまい爲じやハテ煩ふて師匠への奉公もならぬわい
 の夫程あなたを腹をたてしんヨイのあなたを見る前で此
 樽を岩へぶつつけてくだいてまさはう如是畜生發菩提心
 ト樽をぶつつけやうとする 白「コレヤ」そりや何する
 黒「こなたがまかるによつて打割て捨る」 白「ア、ラも
 つたいなや一億万倍く酒のもどぼさつをもつて拵らへ
 た物じや酒に成た所が則ち佛南無さか如来くこぼさう
 といふがもつたいなさにヨイいばいのんでやらう 黒「の
 んでもよいかや 白「そこが臨機應變といふものじやソリ
 ヤいばいつげ 黒「是の能した物じやト黒雲坊つぐ白雲坊
 いばい受て呑む白雲坊天窓をうつて 白「ハ、ア遊樂く
 いばいひつかけた所のじやつこう浄土へ生れた様じやサ
 ア是をさした 黒「いたゝからかト黒雲坊いばいつけて

「わけましてはよい樽でムリ升サアこなたへ進上 白能
香口じやサアおさへた 黒 おさへるア、是何も着がない
ナ密柑でもかち栗でも持て来たらよかつたに 白あるぞ
ヨイ着があるぞおれが夜食にしてやらうと思ふて未
明に取寄たがいそがしさにふやかす間がなかつた是でも
かんで酒をのらうコリヤ〜かぶと頭巾といふ着じや
「あんじや〜」 白 是じやてト干蟾をまたぐらより出す
かひで見えて鼻をふさぐト、思入有て 黒 フウそなたの着
の是か 白 能か〜 黒 なまぐさ坊主めぞおれが酒の
おんじゆかい一通りの事じや出家に似合ぬ干蟾を股ぐら
から出すといふ事があるものか大切な師の坊の檀上をけ
がすといひ破戒むざんな悪僧師の坊へいはねばならぬ師
匠さま〜ト呼ぶ白雲坊せつながつて留る思入あるべし
黒 「イヤ〜さかぬ〜」 白 さかぎよいおれもさかぬ師
匠さま黒雲坊が酒をくぐりける 白 雲坊が蟬をくらひ
升るトいふて兩方ながら口をふさいで 白 所より事なか
れおれもだまつて居やう程にわれもだまつて居る 黒 「だ
まつてゐてさうする者じや」 白 エ、すいめ 黒 すいば

うもやぼてんも 白 酒でなければ世の中いかにぬりやい
今の一ぱいがはき〜きたわい 黒 おれもムつたわいの
「當年の恵方から 黒 福大黒がムつた 黒 二膳や 黒
ヤア 白 三膳 黒 ヤア 白 四膳 黒 ヤア 白 五膳一分を
借てもどかく戯れわをべトおどるりんの音する兩人ヤア
師匠さまが〜と驚く一せいになる 黒 去る程に鳴神
上人の龍神龍女の飛行を封じ國士の雨をどちこめる巖づ
たひの山ふかき檀上にさしてぞのぼりけるト鳴神の出ら
たひ切ると淨瑠璃の内をろ〜檀上への登すはる淨瑠璃
切白雲坊黒雲坊檀の下左右に伺候してゐる 黒 不審たん
せきすいう只是にいにしより雲井してうに遠ざかる世間
よこしたるはたはやはつくるさすじなき瀧の糸の岩にく
だくる水音風聲せう〜くわんのゆかの上威徳應護のま
なじりをたれ南無大師不動明王〜ト淨瑠璃に成り雲の
たえま着ながしまさ片肌ぬき肩に薄衣をかけありにせ
うごをかけ手にまゆもくをもち花道よりそろ〜出瀧
の前立淨瑠璃の掛りにて念佛をす此の内白雲坊黒雲坊
眠る 鳴神 「いてうなかさ山さくらに幽かなりじんせきま

なる深山よはるか瀧壺の元に念佛の聲の聞えるハテあ
やしやナア 鳴 コレ一膳コレ黒雲白雲坊黒雲坊兩僧ト中
けいにて檀上を叩く兩人さをもつふしきよつと目を覺し
「兩僧だじやく千方なせ眠る 白 イエ勿体ない眠り
の致しませぬ 黒 あれ程眠つたじやないか 白 イヤ私の
眠りの致しませぬアノ坊主めが眠りましてムリ升る 黒
コリヤ〜其様な人に言掛をする師匠様私の目を皿
程にして見張て居りました一膳が眠りました 白 嘘をつ
く坊主めどこにおれが眠つたおれが眠つた 黒 おぬし
が眠つた 白 おのれが眠つた 黒 おのれどい 白 おぬし
どト兩方腕まくりして掛らうとする 黒 コリヤさうじ
やト兩人まづまる 黒 夫の沙門の行跡かヨイ眠らずばよ
い眠らぬかしやうならバ今のを聞たか 白 エ、イヤさ今
のを聞たかよ 白 何でムる 黒 それ夫じやてそれで眠ら
ぬといふかやいナント奇怪な事じや烏も通ぬ山おくか
れどそち達三人より外に人ないが 白 左様で座座る
鳴 夫にはるか瀧壺のはどりに聞えてさ悲しき聲にて
念佛をすし 白 エ、トこはがる思入 鳴 ハテ心得ぬ事じ

やコリヤやい妖怪のたぐるか但し幽霊か 白 エ、トこは
がる 鳴 兩僧瀧壺の邊りへ往て見届けて来い 白 エ、ト
大きにさをもつふす 鳴 行ぬか 白 アイト震へる 鳴
かぬか 白 アイトふるふる 黒 長りました 白 黒雲坊師
の坊の御意じや見て来い 黒 こなた見てくれ 白 イヤサ
そなた見てくれ 黒 コレそなたは一膳じやないか 白 夫
がなんどした 黒 兼煮にすはる時にナントそなたが先へ
すはるかおれが先へすはるか 白 それやおれが先へすは
るさ 黒 サ夫じやによつてそなた先へ見て来やれといふ
がなんど悪いか 白 コリヤ兼煮と幽霊と一口にいはいれ
るものかなんでも一膳がいふにしたがぬか 黒 なんぞ
といふと一膳よばはりをするがおれの一膳をたてし先へ
ゆきやれといふが悪いかそなたゆきやいの 白 イヤお手
前おゆきやれいふ事を聞かぬとくらんせざるぞよ 黒 くら
のして見い 白 イヤこいつの 黒 イヤこいつのト兩人腕
まくりをして張り合ふとして其の手を見付られて 黒 コ
リヤなんじやコリヤ 黒 ハイ此の様なつくね芋がござり
ますなら御時の菜に致さうと存じます 鳴 あいつのあ

いつと思ふがそなたの手つきのなんじや 白「此様なかぶ
らが見えましたら汁に致して上やうと存じまして 鳴「大
だわけめ 兩人「ハイト兩人まづさる 鳴「争ひを止て兩僧と
も往て見て來ひ 兩人「畏りました 黒「能氣味な師匠様よま
かられた 白「夫でおれが行ふといふ物をおのれが先ばつ
してサおれに附て來ひ 黒「付て行いで誰が又一人行物
だ氣味のわるい 白「サア〜先へゆけ 黒「そなた行つし
やれ 白「そち行 黒「そなたゆきやれト又あらそう 鳴「ゆ
かぬか 兩人「アイ、ト兩人おづ〜さし足して瀧壺へ行た
えまを見て兩人さをもつふし本舞臺へ來て 白「サア見事
な物じや 黒「さやうとい〜目はうかしのマア阿様な
美しひものを見たが初めてじや 白「どつと行〜無類飛
切じや先あれのなんであらうまらぬ事で 黒「ふすいな坊
主じやなんで有らとアレ女じや 白「わはらめ女の知れ
て居るわい只の女じやない人間でないぞ 黒「おれもさ
う思ふ 白「先是の何じやと思ふすいて見い 黒「天人じ
や 白「天人といふ証據のハテ美しい物を天人の様な
といふのさ其上肩にかけたを見やかりやアレ天人の羽衣

じや師の坊の行力で世界に水がないによつて羽衣を爰へ
洗濯に來たものじや 白「イヤ〜目違ひ〜おれの龍女
じや 黒「龍女といふわけの 白「ハテ師の坊の行力で世界
の龍神龍女は是こ〜ないははへ皆封じ籠られてそこで雨
がふらぬの海も川も池も皆干上りさつてゐるによつて龍
女の居所がない正しく龍宮を店をおわられた物じや今世界
に水といふ物の此瀧斗りじやそこで封じこめられた龍神
の一門一家に逢に來た物じや龍女に極つた〜 黒「ア、
もんもうな坊主じやな龍女といふもの天窓の上極て
さいいか生貝か海老が付てある筈じやイヤ海老の師匠へ
さし合じやによつて龍女じやないアノ美しひ所が天人に
極た 白「ハテ龍女じやよ 黒「イヤ天人じやよ 白「龍女じ
やといふのに 黒「天人じやといふのに 白「又こいつ口こ
たへする 黒「いふ事のはい何とせう 白「くらわすぞ
よ 黒「はつてこますぞ 白「イヤこいつの 黒「イヤこいつ
のト片肌をぬぎ互ひに張ふとする又見付らる〜 鳴「是は何
じや 白「さう〜によりつれい 鳴「ソレなんじや 黒「ハ
白「なんじや 黒「池のどん龜なりやく〜るべいとや

なる深山よはるか瀧壺の元に念佛の聲の聞えるハテあ
やしやナア 鳴「コレ一朧コレ黒雲白雲坊黒雲坊兩僧ト中
けいにて檀上を叩く兩人さをもつふしよつと目を覺し
「兩僧だじやく千万なせ眠る 白「イヤ勿体ない眠り
の致しませぬ 黒「あれ程眠つたじやないか 白「イヤ私
眠りの致しませぬアノ坊主めが眠りましてムリ升る 黒
コリヤ〜〜其様な人に言掛をする師匠様私目を皿
程にして見張て居りました一朧が眠りました 白「嘘をつ
く坊主めどこにねれが眠つたおのれが眠つた 黒「おぬし
が眠つた 白「おのれが眠つた 黒「おのれどの 白「おぬし
どのト兩方腕まくりして掛らうとする 黒「コリヤどうじ
やト兩人まづさる 鳴「夫の沙門の行跡かヨイ眠らすばよ
い眠らぬかしやうならん今の聞たか 兩人「エ「イヤ今
のを聞たかよ 兩人「何でうる 鳴「それ夫じやてそれで眠ら
ぬといふかやいナント奇怪な事じや鳥も通ぬ山おくお
れどそち達と三人より外に人ないが 兩人「左様で座座る
「夫にはるか瀧壺のほとりに聞えてさ悲しき聲にて
念佛をすし 兩人「エ、トこはがる思入 鳴「ハテ心得ぬ事じ

やコリヤやい妖怪のたぐるか但し幽霊か 兩人「エ、トこは
がる 鳴「兩僧瀧壺の邊りへ往て見届けて來い 兩人「エ、ト
大きにさをもつふす 行ぬか 兩人「アイト震へる 鳴「ゆ
かぬか 兩人「アイトふるへる 兩人「畏りました 黒「雲坊師
の坊の御意じや見て來い 黒「こなた見てムれ 白「イヤサ
そなた見てムれ 黒「コレそなたは一朧じやないか 白「夫
がなんとした 黒「雜煮にすはる時にナントそなたが先へ
すはるかおれが先へすはるか 白「それやおれが先へすは
るさ 黒「サ夫じやによつてそなた先へ見て來やれといふ
がなんど悪いか 白「コリヤ雜煮と幽霊と一ツ口にいはれ
るものかなんでも一朧がいふにしたがぬか 黒「なんぞ
といふと一朧よばはりをするがおれの一朧をたて〜先へ
ゆきやれといふが悪いかそなたゆきやいの 白「イヤお手
前おゆきやれいふ事を聞かぬとくらんせるぞよ 黒「くら
にして見い 白「イヤこいつの 黒「イヤこいつのト兩人腕
まくりをして張り合ふとして其の手を見付られて 鳴「コ
リヤなんじやコリヤ 黒「ハイ此の様なつくね手がござり
ますなら御時の菜に致さうと存じます 鳴「あいつのあ

いつと思ふがそなたの手つきいなんじや 白「此様なかぶ
らが見えましたら汗に致して上やうと存じまして 鳴「大
だわけめ 兩人「ハイト兩人さつまる 鳴「争ひを止て兩僧と
も強し見て来ひ 兩人「畏りました 黒「能氣味な師匠様よま
おつとに別れたか 白「アイト泣く 鳴「フウ生別れか
死別れか 白「然かも今日が丁度七十七日 鳴「四十九日か
たえ 白「アイ 南無阿彌陀佛 黒「かたみこそ今仇なれ之
なくば忘るゝ事もあらまじものをあら〜しき此薄衣淨
世のあかをすゝがんと存じませればいかなる事にや百日
あまり日でりして雨がふらねば井の水逆もかひまして
ひとへを洗濯致しませう水がござりませぬ 承ねば此
山の瀧の瀬へかゝる日でも水たえず清く流るゝ名水
じやと 承りましたによつて女子の身の踏なれぬ山路を
のぼりまして是迄参りました只いまのかたみを洗ひに参
りましてござりまするゆかしきつまつかさしきがあつ
とみづからが心の内を推量なされて下さりませいなア
ト泣く 鳴「〜哀れな物語見れば若い身ぞらで去るも
のハ日々にはうとしさあつとの事をも打忘れとつまつさか

さねべきようきの女きつと貞婦のみさはを立てつまつかの
たみを洗濯せんと嶮岨をいどのすよちのぼつたる志ハ
ハテかゝるゝ至極じやナア夫程のなからいならばそいつ
れた頃はいかふ中がよかつたと思へた 鳴「中の能だんか
いナア天にあらば比翼の鳥地にあらば連理の枝といひか
はしたるこしかたを思ひ出せば面白事でもござりまし
た 鳴「ぼんのう即菩提婦人に對して無詞をかはずも因縁
といふものじやそくそくごしやうの回向の篇じや其はな
しが聞たいものじや 白「傍聴しやても心のうさをばらし
どうござりまするナント傍はなしやませうか 白「ソ
ヤよからう〜サはなしや 白「サア咄しまするがそこに
爰どの邊かへだつて居りまするひくらはなしやしたら傍
耳へ入るまいし高ふすしたら山ひこにこたへてすさまじ
ふござりませうどうぞ傍へ寄て近ふはなしやしたいも
のでござりまするが傍へへ行れず 鳴「ちつともだんない
こ〜へおじやそこを咄して瀧の音にまぎれて中〜耳
へ入らぬ爰へおじや 白「アノいてもだんないか 白「だ
んないとも爰へ〜 白「イヤそんなら傍へ参りませう

ト瀧置を放れて本舞臺へつか〜と来る 白「コリヤ〜
〜ならぬ〜 白「アモ師匠様の傍ゆるしで
ござんす 白「ナニノ傍ゆるし師匠様の仰渡されて女人禁
制 黒「さんせい東方白龍白雷せいもんくつさいならぬ 白
「ア、けからしい七里けつばい〜 黒「ア、七里けつ
ばい〜まぢちんがいつちんいちんがさんち二天作の
こんでどうだんの女人飛びさらう 白「そうじや〜此檀
上へ女を入れて行法のをろばんが合ぬかい 黒「南無は
ち〜算用をのる 兩人「ちん〜 白「アセあの様いふて
てござんすわいなア 鳴「ア、あの様にいふはつじや檀上
近く女をよせる事の叶はぬそこで兩僧が膝元ちかくよつ
てそれではなせ〜 白「アイ〜そんなら爰で傍はなし
やませう参二人様も聞て下さんせ 黒「ア、よるまい
〜 白「まやどいふて見イソウ遠のいてはなした〜
たえ 白「ア、ぎやうさんな 黒「ナフ一膳 白「ア、師匠の 兩人
いひつけじや 白「さらばはなしませうか 鳴「さらば聞ら
か 白「耻かしながら其どのに馴ましたのナ遠い事でも
ござんせぬ去年の春の彌生なかば清水へ花見にいたと思

はまやんせ見渡せば柳櫻をこき交て都春の錦といふハ
アノ音羽山の事でござんす慢慕を打廻して爰でハ琴の爪
音かして〜三味線の鼓のどうたふやら舞ふやらイヤモ
ウたまつた事でござんせぬわしもとさまか〜さまの
免しをうけて花見よいたと思ひしやんせまたれハナ慕の
外年の頃の甘茶あまりのどのござんがりと立てわしが慕
の内をのぞいていやしやんしたわいなアひよつとわしが
見付たと思ひしやんせ其男のけだかさかわゆらしさとい
ふものハ目つきなら口もとならいやもうどうもいはれた
事じやないわいのどんどわしが方からいとまう成たと思
はしやんせ 白「アノ近付でもないのに 白「サイナア其か
わゆるしきといふ物のほんにちりけもどから 黒「ぞつと
したか 白「ぞつとの段たいナ 黒「がた〜震へたか 白
ふら〜段かいナア寒うなつたりわつら成たり其殿子の
顔に見えればたと思ひまやんせ 白「面白 黒「たまら
ぬい 白「またれハ先の殿傍もいたづらあつちからもわ
しが顔をじつと見ぬ様でいさしやんしたと思ひしやんせ
白「うまいなく 黒「水飴で餅喰ふ様でなかつたか 白

ぎ玉へト又つぐ「あんどあみく」とうけたであらふ
「見事トやわひのヲ、こわト飛のく」「なんどしたく」
おにがこわい」
「それ盃の内にくちなわのへびが
ゐるわいの」
「いかにあはうでふる何もあつものを
「それゐるわいの」
「ハ、アきこたへびトやないわれ
は、繩トやそれ見や」
「ほんにトやハ」
「ア、おく
びやうナ」
「アリヤ何のトやハ」
「アリヤ大事のメ
で雨がふらぬトやて」
「どうしてハ」
「大事あこつち
やど人にはあすまいとぞ大内殿にうらみが有て世界の龍
神をアノ岩窟にいのりこんで其上へみつ法のメをひいて
今でも雨をふらせうと思へばのぼつてひいたメの真中を
切るトやと龍神が飛さる大雨車軸トやて大事のとトやぞ
た」
「アノメの真中を切さへすれば龍神が飛去つて雨が
ふるかへ扱もふしきあ事のサアのまんせトつぐ此内のそ
み有」
「おつと北山櫻新狂言の名題トやサアあげやせ
う」
「祝ふて三飲いやならおかんせ」
「イヤとはいひも
いたしやせぬにト此内せりふ始終生酔のこなし」
「モウ
ならぬ」
「トいひ」
「寐る」
「ヲ、く」
「よふのまんし

た夫でこそいとしひばんさんなれホンニばんさんトやな
かつたこちのどのごよわしが性根のモンおきさんせく
是はならぬぞアノ祝言に床入よりささへたわいもあぐね
るものかへおきさんせぬとこそぐるぞへく申トゆり起
しわたりを見て思入あり」
「エ、勿体ない恐ろしや鳴
神様ゆるして下さんせみづからが心より御まへをおとし
たではふんせぬかたトけあくも帝様の勅命によつて有権
の高僧を色と酒とに性根を亂し浅ましひ体にあしては我
ながら恐ろしや今醉の内に大事をおしへさしやんしたお
しへの如くアノメを切らば龍神龍女はたちまちに海底へ
飛さり五穀成就の雨のわしは襟をたばねてつくく」と見
上れば千丈の巖のアノ内にこそトメ繩をきつとにらみ身
つくろひして岩の上へ上る此内ふるへる思入さすくわ
り懐剣をとり」
「まんまどすました南無諸天善神皆龍
王雨をふらしてたびたまへ南無歸命てうらい」
「ト太鼓
うたひにてメ繩を切るとしかけにて女龍男龍大雷舞たい
先へほんの雨おびたしく降る此長うたひの内たはま花
道へにげては入る所へ白雲坊黒雲坊たまたすきやふれた

る管笠にて同宿大せい皆く衣たまたす尻をからげ或
は傘管笠いとだてあとかむり或は耳をふさぎさわきなが
ら花道よりかける皆く師匠様くどこへくと呼び鳴
神を尋る白雲坊鳴神を見付る」
「ヤア爰トや」
「ト大勢
して抱起す此内鳴神まつかに成り酒に酔たわいなき思入
白」
「ム、くさ」
「酒蔵へは入た様ナ師匠様」
「師
匠様」
「ト鳴神少し目を覺したわいあきてい」
「コレ鳴
神様行法が破れましたわいの」
「アレ見れば密法のメ繩
もひつちさされて龍神は天へ欠落を致しましたわいの」
「トやによつて雨が降升わいの」
「大雨に成りましたは
白」
「雷が下り升るわいの」
「火がみあかりでムリ升夫でみ
んな臍にふたをして居り升るわいの」
「南無らん雷ぐう
せいでんぢうばくぢうたいうん念び観音力ト皆くくわ
ばら」
「此内大雷大雨鳴神思入」
「何だ雨がふる」
「こ
ばし升るわいの」
「あんだ雷が鳴る」
「アレト又大さく
鳴る鳴神思入有て」
「コレなせ雨が降るなせ雷があるヤ
イトなく」
「コレ師の坊さきたは最前の女におとされさ
つさしやつたぞやわれを只の女トやと思つてゐるかに

げていた跡で聞たれば「雲のたはまといふて大内第一
の官女勅説をもつておまへをれとしに來たのでふるわい
のれまへのおちさつしやれた上に又雷が落やうかど皆丹
ば色になつて居り升るわいの」
「扱は我が行法を破らん
が爲に雲のたはまといふか勅説をもつて爰に來りしよナ
ハア、其たはまをト夫よりあれだち舞臺中を飛めぐりさ
がす坊主皆く跡に付て廻るのそみあり此内始終雷り
「ヤアラ無念や口惜やナア寸善尺魔のせうげ佛罰を家り
がの密法の行破れしよナアよしわれ破戒の上からは生な
がら鳴るいかづちと成てかの女を追かけんにあんせうか
たき事あらん天は三十三地はたんらんならくの底までも
雨となり風とありト風諸神のみそら雲いく」
「あるいか
づちの上人が念力まぢかくかれを追掛んに東は奥州外か
濱」
「西は鎮西さかひがしま」
「南は能野ちの瀧
淨瑠璃」
「北は越後の荒海まで」
「人間の通はぬ所」
「千里も
ゆけ」
「萬里もいで」
「たひかけん鳴神はト是より淨瑠
理あどをしたふてと大三重大雷鳴大雨大せろくにて鳴
神大われにわれ花道へ馳ては入る同宿皆く師匠様く

と跡をしたひは入る此内なげ人形あげ岩のそみあり
引幕

明治廿七年四月廿七日印刷
明治廿七年五月 日發行



定價金拾錢

著者 故二代目 市川團十郎

發行者 相續者 堀越秀

印刷者 東京府京橋區築地二丁目廿三番地 岡野碩

發行所 東京府京橋區築地二丁目四十四番地 歌舞伎新報社
右 同 所

印刷所 明教印刷所

東京府京橋區三十間堀二丁目一番地

版權及興
行權所有



